

# 『稲むらの火の里』和歌山県有田郡広川町広～探訪～

安政南海地震津波の襲来時に稲むらに火を放って村びとを避難誘導し多くの命を救ったと云う濱口梧陵伝説の地を始めて訪問した。この逸話は小泉八雲の“A Living God”から中井常蔵の“稲むらの火(昭和9年文部省教材公募に応募し入選)”へと引き継がれ、最近でも恰好の防災教材として評価されている。それ以上に梧陵が評価されてよいのは、津波襲来後の被災民救済と復旧に尽力し、巨額の私財を投じて村を津波から防御するための堤防(高さ5m、長さ600m)を築いたことであろう。この工事に村びとを雇用することによって広村は奇跡的な復興を遂げ、その後、昭和21年の南海地震の際には津波による被害を最小限に止めることに成功している。

## 濱口梧陵記念館

木造建築としても優れた旧濱口邸がそのまま記念館として利用されており、濱口梧陵という一人の偉人のための歴史資料館となっている。

## 津波防災教育センター

文字通り津波防災について学習するための施設となっている。3D映像で津波の脅威を啓発するのは良いが3D効果を駆使し過ぎるのは悪趣味でもある。また教材の多くが2004年のスマトラ地震津波の資料に依存しているのも問題で、もっと当地域の特色が強調されても良いのではないかと思われた。



濱口梧陵記念館(手前)と津波防災教育センター(奥)

## 稲むら(刈り取った稲を積み重ねたもの)に火をつけたのは本当か？

地震が発生した12月下旬に稲むらがまだ存在していたらどうか？  
無理して美談にしなくても，浜口梧陵の取った対応は評価されるべきであろう．



内閣府防災担当平成16年監修による紙芝居  
『津波だ！いなむらの火を消すな』より．  
画は藤本四郎氏による．



すすき(籾を取り除いた後の藁の堆積物)  
浜口梧陵伝 [www.sam.hi-ho.ne.jp/aiiku](http://www.sam.hi-ho.ne.jp/aiiku)  
による．

# 理科年表の記述によると

番号	西暦(日本暦)	北緯	東経	M=マグニチュード/地域:(名称)被害摘要
223	1842 4 17 (天保 13 3 7)			琉球:宮古島などで5日頃から地震。7日の地震で石垣が多く崩れた。14日まで数十回の地震があった。
224	1843 3 9 (天保 14 2 9)	35.35°N	139.1°E	M 6.5 足柄・御殿場:足柄登沼村で石垣・地の崩れ多く、御殿場の近くや津久井でも被害があった。
225	1843 4 25 (天保 14 3 26)	42.0°N	146.0°E	M 7.5 鋼路・相室:厚岸圓泰寺で被害があった。津波があり。全体で死 46。家屋破壊 76。八戸にも津波。松前・津軽で強く感じ。江戸でも有感。[2]
226	1844 8 8 (弘化 1 6 25)	33.0°N	131.3°E	肥後北部:28日まで地震が多く。久住北里で特に強かった。杖立村で落石により百姓屋崩れる。
227	1847 2 15 (弘化 4 1 1)			越後高田:諸所破損。長屋も破損。
228	1847 5 8 (弘化 4 3 24)	36.7°N	138.2°E	M 7.4 信濃北部および越後西部:「善光寺地震」被害範囲は高田から松本に至る地域で、特に水内・更級両郡の被害が最大だった。松代領で潰家 9550。死 2695。飯山領で潰家 1977。死 586。善光寺領で潰家 2285。死 2486 など。全国からの善光寺の参詣者 7千~8千のうち、生き残ったもの約 1割という。山地で山崩れが多く。松代領では 4万ヶ所以上。虚空蔵山が崩れて犀川をせき止め。上流は湖となったが。4月13日に決壊して流出家屋 810。流死 100余。
229	1847 5 13 (弘化 4 3 29)	37.2°N	138.3°E	M 6 1/2 越後郡城部:善光寺地震の被害と区別できないところが多い。潰家・大破ならびに死傷があった。地割れを生じ。泥を噴出し。田畑が埋没したところもあった。
230	1848 1 10 (弘化 4 12 5)	33.2°N	130.4°E	M 5.9 筑後:柳川で家屋の倒壊があった。
231	1848 1 13 (弘化 4 12 8)	40.7°N	140.6°E	M 6.0 津軽:弘前の城内・城下で被害。黒石・猿賀(弘前の北東)辺で特に強く。潰家があったらしい。
232	1848 1 25 (弘化 4 12 20)	32.85°N	130.65°E	熊本:熊本城内で石垣を損じ。座敷などの壁が落ちた。
233	1853 1 26 (嘉永 5 12 17)	36.6°N	138.1°E	M 6.5 信濃北部:善光寺で被害。長野市中で下屋の破壊があった。松代領で潰家 23。
234	1853 3 11 (嘉永 6 2 2)	35.3°N	139.15°E	M 6.7 小田原付近:小田原で被害が大きく。城内で潰れや大破があった。小田原領で潰家 1千余。死 24。山崩れが多かった。
235	1854 7 9 (安政 1 6 15)	34.75°N	136.1°E	M 7 1/2 伊賀・伊勢・大和および隣国:12日頃から前震があった。上野付近で潰家 2千余。死約 600。奈良で潰家 700以上。死約 300 など。全体で死者は 1500 を越える。上野の北方で西南西~東北東方向の断層を生じ。南側の 1km の地域が最大 1.5m 相対的に沈下した。本津川断層の活動であろう。
236	1854 8 28 (安政 1 7 15)	34.6°N	131.8°E	M 6.5 陸奥:三戸・八戸で被害。地割れがあった。

番号	西暦(日本暦)	北緯	東経	M=マグニチュード/地域:(名称)被害摘要
237	1854 12 23 (安政 1 11 4)	34.0°N	137.8°E	M 8.4 東海・東山・南海諸道:「安政東海地震」被害は関東から近畿に及び。特に沿津から伊勢湾にかけての海岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲い。被害をさらに大きくした。この地震による居宅の潰・焼失は約 3万軒。死者は 2千~3千人と思われる。沿岸では著しい地殻変動が認められた。地殻変動や津波の解析から。震源域が駿河湾深くまで入り込んでいた可能性が指摘されており。すでに 100 年以上経過していることから。次の東海地震の発生が心配されている。[3]
238	1854 12 24 (安政 1 11 5)	33.0°N	135.0°E	M 8.4 畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道:「安政南海地震」東海地震の 32 時間後に発生。近畿付近では二つの地震の被害をはっきりとは区別できない。被害地域は中部から九州に及び。津波が大きく。波高は甲本で 15m。久礼で 16m。種崎で 11m など。地震と津波の被害の区別が難しい。死者数千。室戸・紀伊半島は南上りの横動を示し。室戸・甲本で約 1m 隆起。甲浦・加太で約 1m 沈下した。[4]
239	1854 12 26 (安政 1 11 7)	33.9°N	132.0°E	M 7.3~7.5 伊予西部・豊後:南海地震の被害と区別が難しい。伊予大洲・吉田で潰家があった。鶴崎で倒れ屋敷 100。土佐でも強く感じた。
240	1855 3 15 (安政 2 1 27)			遠江・駿河:大井川の堤損れ込み。焼津で古い割れ目から水が噴出。
241	1855 3 18 (安政 2 2 1)	36.25°N	136.9°E	M 6 1/2 飛騨白川・金沢:野谷村で寺・民家に破損があった。保木藤村で民家 2軒が山抜けのため潰れ。死 12。金沢城で石垣など破損。
242	1855 8 16 (安政 2 7 4)			米子:城内で所々崩れ。地割れもあった。
243	1855 9 13 (安政 2 8 3)	38.1°N	142.0°E	M 7 1/2 陸奥:仙台で屋敷の石垣。堂寺の石塔・灯籠崩れる。山形県・岩手県南部・新潟県分水町・常陸太田で有感。
244	1855 11 7 (安政 2 9 28)	34.5°N	137.75°E	M 7.0~7.5 遠州灘:前年の東海地震の最大余震。掛塚・下前野・袋井・掛川辺がひどく。ほとんど全滅。死者があった。津波があった。
245	1855 11 11 (安政 2 10 2)	35.65°N	139.8°E	M 7.0~7.1 江戸および付近:「江戸地震」:下町で特に被害が大きかった。地震後 30 余ヶ所から出火。焼失面積は 2.2 km <sup>2</sup> におよんだ。江戸町方の被害は。潰れ焼失 1万 4千余。死 4千余。瓦版が多数発行された。
246	1856 8 23 (安政 3 7 23)	41.0°N	142 3/4°E	M 7.5 日高・磐城・渡島・津軽・南部:被害は少なかったが。津波が三陸及び北海道の南岸を襲った。南部藩で潰失 93。潰 106。溺死 26。八戸藩でも死 3 など。余震が多かった。1968 年十勝沖地震に津波の様子がよく似ており。もう少し海溝寄りの地震かもしれない。[2]
247	1856 11 4 (安政 3 10 7)	35.7°N	139.5°E	M 6.0~6.5 江戸・所沢:江戸で壁の剥落や積瓦の落下があり。傷 23。衆川で家屋倒潰 15 という。

つなみひなんちず  
津波避難地図

EVACUATION ROUTE at TSUNAMI

「縮むらの火の里」

津波防災に取り組む町

The Town which wrestles with disaster prevention

広川町は、津波や高潮の被害を受けやすい地形にあるため、災害から守る努力を積み重ねてきました。戦後、昭和26年(1951)から広湾一体の改修工事を進め、流石石垣や橋脚の堤防が補強されました。さらに、広川町の拠点の移設を行うための埋立工事の際、防災機能の向上も図られました。また、平成10年度より県事業として湯浅広湾口部に津波防波堤の整備を進めています。

広川町では、安政地震津波が発生した旧暦11月5日(現在では11月3日)に、全国でも珍しい「津浪祭」が行われ、濱口橋脚の偉業に感謝するとともに、防災意識の次世代への継承の努力が続けられています。



広川を襲う安政地震津波の実況図



広湾上空からみた広川町広地区の海岸  
広湾の埋立地の中央に町役場の新庁舎が見える。津波や高潮に備えて、埋立地は高さ7mのコンクリート護岸で囲まれており、右側の江上川河口には水門が設置されている。



津浪祭の様子



一時避難場所

一時避難場所	避難場所の広さ
① 広川町役場 3F	500m
② 津波防災教育センター 3F	300m
③ JA ありだ南広支所	900m
④ 広八幡神社	1,400m
⑤ たちばな養護学校	650m

- 浸水3m以上
- 浸水1m以上3m未満
- 浸水1m未満

© 和歌山県建設部、和歌山県防災課、和歌山県消防協会、和歌山県消防本部、和歌山県消防団、和歌山県消防組合、和歌山県消防協会、和歌山県消防本部、和歌山県消防団、和歌山県消防組合、和歌山県消防協会

地震の後は、津波警戒。  
さあ避難!!

和歌山県

# 和歌山県広川町の津波に対する防災対策



津波防止ゲート

津波防止ゲート

浜口梧陵の津波防止堤

